

Kappa Novels



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 うまい話あり

昭和47年5月30日 初版発行
昭和49年12月1日 9版発行

著 者 しろ 城 やま 山 さぶ 三 ろう 郎

神奈川県茅ヶ崎市東海岸
北4-3-12

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 盛 照 雄

東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所

東京都文京区音羽2
振替東京115347

株式会社 光文社
電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (ナショナル製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Saburō Siroyama 1972

(分)0-2-93(製)02214(出)2271 (0)

長編小説

うまい^{はなし}話あり

しろ やま さぶ ろう
城山三郎



カッパ・ノベルス

目次

ある夕方	5	呼ばわり山	139
人事相談	12	愛の泉	151
大人の砂あそび	23	心意気	161
変身	34	無理難題	169
前夜	50	風の便り	181
狐つき きつね	66	問答無用	193
客引き	80	破れかぶれ	201
生活の知恵	90	蒸発の先輩	211
事故	100	待ち伏せ	220
千客万来	108	再会	229
搜索願	120	予告	244
二つの銀座	130	春の風	255

イラストレーション

下高原千歳しもたかはらちとせ

ある夕方

「うまい話があるが、どうだね」

と、きかされたのは、夏の終わりの日曜日、ドライブ帰りにガソリン・スタンドに立ち寄ったときであった。

車から降り立った津秋に、スタンドの経営者である小野田が、少し秘密めかした口調でささやきかけてきた。

うすい水色の夕闇の流れる中に、「50秒給油」という看板の電光文字がまたたいている。妻の佐代子は、助手席にすわったまま、その電光文字の点滅を、子供のような目で見つめていた。平和な、どこにでもあるドライブがえりの風景であった。

小野田のささやきは、その風景に衝撃を与え、やがて津秋夫婦の全人生をゆさぶることになる。

津秋は、たいして気のりもせず、ききかえした。

「どんな話だね」

「経営者になる話だ。たとえば、このおれのように」

「からかうなよ」

津秋は、しぶい顔をした。

スタンドの駐車場のほしには、小野田のものである外車のスポーツカーが、銀鼠色ぎんねいろにぶく光っていた。しがない一サラリーマンの津秋たちが乗ってきたのは、賃借りの国産小型車。同郷同年の二人の間には、それだけの差がある。それというのも……。

「おれは、きみとちがって、金もなければ、土地もない。ろくな学歴もない。経営者になれるはずがないじゃないか」

「しかし、やる気はあるだろう」

「うん」

小野田は、深々と津秋の目をのぞきこみ、念を押してきた。「人一倍あるはずだな」

津秋がうなずくと、

「それで結構」

「しかし、そんなことが資格になるのか」

「もちろん、いちばん大事な資格さ」

小野田は、津秋と車の中の佐代子に半々に目をやり、

「ところで、きみ、東京へ出て十五年になるな」

「うん」

「その間、板橋に住み、日本橋の会社で働いてきた。そ

れでいてきみも健康だし、それに奥さんも丈夫そうだ」

「うん」

「これも、重要な経営者の資格だ。なにしろ、スモッグのただ中で、十五年間、元気に生きてきたのだから」

小野田は、まじめな顔で、言った。

津秋は、つりこまれてうなずき、

「たしかに、おれたちは丈夫にできてる。東京では弱い植木なんかは、すぐ、まいってしまふ。今日も家主にたのまれ、アパートの庭の弱った植木を大磯まで運んできたところだ」

家主の別宅は大磯にあり、そこへ運んで行くと、木はみるみるあざやかな緑をとり戻し、花の咲かなかったものが、咲き出す。元気がよくなったところで、また、板橋へ持ってくると、半年足らずで、首を曲げ背をまるめだす。そこでまた「入院」のため、車に積んで大磯へ。もちろん、大きな木は運べず、車の中やトランクに積めるかぎりのツツジやツバキなど、花木類が主である。

家主の鳥居源作は、がめつい。植木を運搬するのに、津秋夫婦のドライブ好きに目をつけて、

「板橋・大磯間のガソリン代と有料道路代の半額だけ出すが、どうだ」と、もちかけた。

「どうせ、ドライブついでじゃないか」

と、それだけ出すのさえ、惜しそうである。レンタカーの料金など、気づかぬふりをしている。

しゃくにさわるが、津秋たちのドライブは、湘南や伊豆、箱根方面が多い。大磯は通り道である。少しでも経費が助かるならと、ひき受けた。源作に感染して、こちら、金にこまかくなっていた。

源作の大磯の別宅は、海を見おろす丘の中腹にある。小型車を降りてから、なお五十メートル近く、植木をかついで運び上げねばならない。そうしてはこんだところ、源作はカルピスもお茶も出さない。植木に水をやるついでに、津秋夫婦にもコップに水をくれるだけ。

「生きものには、水がなによりだ」

と、くり返しきかされた。

それでも、津秋夫婦は腹も立てずに、植木の「入院」を「退院」を手伝っている。

運んでいるうち、だんだん植木がかわいくなった。せまく汚ないアパートの庭でしょんぼりしているツツジなど見ると、気が気でなくなる。がめつい家主につかわれるというのでなく、かわいい草木を救ってやらなければという気になる。

それにしても、植物があればほど弱るものなら、田舎そだちの人間のからだにも相当にこたえているはずだと思
うが、津秋夫婦は無病息災である。排気ガスにも、光化
学スモッグにも強い。

だが、それが、現代の経営者の資格といえるだろう
か。

給油は終わり、佐代子が代金を払った。つり銭をとり
に、若者が小兎のように事務室へ走りこんで行く。別の
若者は、佐代子が乗ったままの車を、出やすい位置へ動
かした。

すぐ横の駐車場では、中型車がエンジンをふかし、藤
色の煙をはいていた。

小野田は、鼻をならし、その排気を吸いこむしぐさを
した。

「われわれは、排気ガスをもろに浴びて働くし、会社自
体がこうした幹線道路沿いにある以上、経営者がスモ
ッグに強くなくては、成り立たぬ商売だ。いや、排気ガス
やオイルのこげるにおいが、あまくて、おいしくて、た
まらなくならないと、だめだ。かすみをくう仙人のよう
に、排気ガスをくって生きて行くんだ」

「まるで怪獣だな」

「そうだよ。草木も枯れる東京で、いっぱしに生きて行
くには、大なり小なり怪獣にならなくては」

小野田は、長く四角い下駄げたのような顔をゆがめて笑っ
た。まだ三十代だが、それでも、男七人女三人をつかう
経営者の一人。かつて親のすねをかじり、いま、排気ガ
スをくって生きている怪獣の一匹である。

「これを読んでみる」

小野田は、ズボンの後ろのポケットから、一枚の書類
をとり出して、津秋にわたした。

〈経営者募集！〉

の文字が、津秋の目におどりこんだ。

へあなたに、ひとなみ以上の意欲と能力があるなら、わ
が社の経営者となって、思う存分、力を発揮してみませ
んか。ただ一度の人生を、やけ酒にまぎらわせていて
は、あなたの損だけでなく、国家の損失です。やる気と
若さを提供してください。そのほかは、学歴も資本も土
地も特別の職歴も、なにもいりません。世界の超一流企
業であるリンカーン石油が、あなたのために、経営者の
座を用意します。さしあたって経営者としての報酬は、
年五百万ではいかがでしょう……

リンカーン石油は、世界で指折りのマンモス企業であ

る。日本進出はおくれたが、それだけに精力的に市場の拡大をねらい、スタンド網の新增設につとめている。人材はたしかに必要ではあるが――。

津秋は、ため息をついた。

「うまい話だ」

「うまい話とは、おれが最初に言った」

「うますぎる。それに、このとおりのうまい話なら、応募者が殺到するはずだ」

「公募すれば、もちろん殺到するさ」

「してないのか」

「これまでは、ガソリン・スタンド仲間へだけの呼びかけだった。いわば縁故募集なんだ。それで数だけは集まったが、会社が欲しい人材が意外に少なかった。若すぎたり、人物として思わしくなかったりしてね」

「思わしくないとはい？」

「つまり、業界の裏を知りすぎていて、うっかり任せられないという意味だ」

津秋は、身をのり出した。

「そこを、もう少し、説明してくれ」

小野田の説明は、次のようであった。

リンカーン石油では、直販網強化のため、スペシャル・

マネジャー制度を発足させることになった。

一等地に会社で土地を買い、設備もつくったうえで、有能な人材をスペシャル・マネジャー（特別支配人）として選任し、経営を委ねようというのである。これは、長年、スタンドで働いてきた番頭格の人に独立のチャンスにあたえるという一石二鳥の効果のあるはずであったが、歴史の浅い日本のリンカーン石油のスタンド網で働くのは二十前後の若者ばかり。一方、年輩者は、スタンドからスタンドへ渡り歩いてきた古強者が多く、安心できない。

このため、内輪の募集だけでは、フレッシュな人材は得られぬとわかり、近々、新聞などで公募する予定。その直前に、一足でも二足でも早く申しこんでおいたほうが、有利ではないか、との話であった。

受ける受けないはべつとして、やる気のある男にとって、わるい話ではない。

「社長、お電話です」

女事務員の声に、小野田は横にとぶようにして、事務室へもどって行った。少し首をねかせ、目はスタンドを見渡しながらか、電話を受ける。話の途中、目と顎だけで近くの女事務員になにか言いつけた。

いかにも若々しい経営者の姿である。津秋は、まぶしく、また、いまいましくもあった。

中学時代、学力も体力も、津秋は小野田に負けなかった。クローラーも教えてやったし、試験の前には、きまつてノートを貸してやった。いや、試験の最中、答案をずらせて書きうつさせてやったことも再三である。

そうした男が、東京のどまん中にガソリン・スタンドを構え、十人の従業員をつかっている。いつか小野田にもらった名刺には、「小野田産業株式会社社長」の肩書があった。

たしかに、社長にちがいない――。

スタンドは、環状七号線近くの中仙道沿いにあった。

ふだんより交通量の少ない日曜日とはいっても、次から次へと車はいってきっていた。小型トラックが出て行き、中型車がすべりこんでくる。作業服の若者たちが、右、左にとびかう。レジの女の子が、領収書をもってとび出てくる。

小野田は受話器をきいたとたん、また次の電話がかかって、応対していた。はずんだ空気の中で、いかにも満足そうな顔である。

津秋は、車にもどって、スタートさせた。若者の一人

が走ってきて、街道へ誘導してくれた。

走り出した車の助手席で、佐代子がふりかえって、スタンドを見つめる。津秋も、ルームミラーを見た。

うすい水色の闇の流れる中に、水銀灯にうかび上がった小野田のスタンドは、人工の夢の国の風景に見えた。

「いいわねえ」

と、いつまでもふりかえっている佐代子に、津秋は言った。

「あいつは、家がいいんだ。あの土地も資本も、山林を売って、おやじが出してくれたんだ。おれだって……」

「あら、わたし、小野田さんをうらやましがつっていたのじゃなくてよ」

「それじゃ、なんだ」

「きびきびした働きぶりに感心してたの」

津秋はまたルームミラーを見たが、スタンドは視野から消えていた。

「どうしたの。あなたこそ、うらやましそうじゃないの」

「うらやましいさ。男なら、あんなふうに……」

津秋はそう言うてから、ひとり心にきめるようにつぶやいた。

「しかし、なろうと思えば、おれだってなれる」

「うん、なれるわよ」

津秋の言うことなら、なんでも調子よく相槌を打つのが、佐代子の欠点であり、長所でもある。

「無責任な受けごたえをするな」

「ごめんなさい」

「しかし、なれるんだ」

「あら、あなただって……」

「これを読んでみろ」

津秋は、〈経営者募集〉の書類を佐代子に手渡した。

どんな反応を示すか、様子をうかがう。

「いい話のようねえ」佐代子は一読して言い、「でも、うますぎないかしら。どこかに、おとし穴でもあるのでは」

書類から目を上げたが、とたんに高い声を立てた。

「あら？ あれ、おとうさんでは」

すれちがった中年の男と女の二人づれをふりかえる。

「とめるか」

「おねがい」

津秋は急ブレーキをふんだ。後続車がクラクションをならす。

佐代子は、ドアをあけて、かけ出した。アベックのす

ぐ後ろまでせまる。男がふりかえった。

佐代子は立ちすくんだ。ひとちがいのようであった。

いたずらを見とがめられた子供のようになり、すごすごと車へもどってきた。

「ちがっていたわ。でも、ちがっていて、よかった。もし、おとうさんなら、大声でどなられたわ」

佐代子は氣をとりなおしたように言う。津秋は、ふたたび車をスタートさせて、

「おかしな父娘だな」

「おとうさんは、ずっと、そうなの。東京へ出かせぎにきていながら、一度も手紙をよこさない。居場所も知らせてくれないの。同じ東京に娘のわたしが住んでいるというのに」

「なぜだと思う」

「そういう性分しょうぶんなのね」

津秋はそこに義父の暗いかげを感じるのだが、佐代子は疑おうとしない。氣質のせいにして割りきっている。もともと楽天的なうえ、身びいきである。

佐代子は、氣をまぎらすように書類を見ていたが、ふいに、その目を輝かせた。

「ガソリン・スタンドを経営すれば、父を見つけやすい

わね」

「……………」

「どう、やってみない。わたしも、毎日、お店に出て見はっているわ」

津秋は苦笑した。三十近くにもなって、この女はまだ子供のようなことを言う。目先のことばかりで、物の軽重がわからない。扱いやすいが、足手まといになる。それがこの女の魅力であり、欠点でもある。

津秋は眉を寄せ、たしなめるように言った。

「独立するのは、きみの父親さがしのためじゃないんだぞ」

佐代子は、首をすくめた。右が一重、左が二重まぶたの目が笑う。鼻すじも首も細く、さびしい顔立ちだが、そのまぶたのちがいが、愛らしい救いとなっている。

「それに、さしあたっては、父親のことより、子供のことを気にかけるんだな」

津秋に言われて、佐代子ははじめたように、ややふくらみもちはじめた自分の下腹部に目をやった。

「ええ、今度こそ、無事に生まなくてはね」

結婚してすぐできた子を、共かせぎのため、おろした。だが、それで流産ぐせがついたのか、そのあと、子

供をつくろうとして、二度、三カ月の折りに流産した。ただ、今度は、すでに六カ月にはいったが、順調である。

どうしても、安産させたかった。それというのも、ここで生まなければ、その子供が学校を出るまえに、津秋は、定年に追いこまれる。

もっとも、年齢にかかわりなく働ける職場をもっていれば、その不安もないのだがと、津秋は、また転職を思った。

車を走らせて行く右手に、別のガソリン・スタンドが見えた。くすんだ家並の続く中で、その一画だけが、あざやかな照明に浮かび上がっている。

水を打ったひろい敷地、色とりどりのみがかれた車、立ち働く赤帽子の若者たち。

津秋も、佐代子も、思わず見とれ、前の車に追突しそりになった。

「いいわねえ」

と、佐代子。

津秋は、それには答えず、自分をいましめるように言った。

「この時間は、逢魔が時という。悪魔が出てくる時間な

のだ。見るもの、きくもの、よほど割引しなくてはね」佐代子はいやなずくと、目を書類にもどした。そして、次の信号でとまったとき言った。

「割引するとしても、年収五百万はすてきよ。いまの三倍になる。アパートから出られるわね。車ももてるわ。植木運びでないドライブもできる……」

津秋は、また苦笑した。女は、あいかわらず志がひくい。

「ばか。ただ、金もうけのためではない。男の生きがいの問題なんだ」

かっこうよく言ってみたが、津秋にとっても、年収五百万は大きな誘惑であった。

それ運んでくるのが、たとえ悪魔だとしても、やはり、逢ってみたい、ためしてみたい気がするのだった。

人事相談

九時かっきり、始業ベルが鳴りわたった。

全員いっせいに立ち上がって、

「おはようございます」

津秋も、その一人であった。（まるで、幼稚園か小学校だ）と、内心いまいましく思いながら、声を出す。ゆううつな一日が、こうしてはじまる。

太平製鉄は、資本金三百三十億のマンモス会社である。日本橋に最近建てられたばかりの本社社屋は、十七階建のまばゆいほどの高層ビル。

ただし、津秋は、そのビルを窓ガラス越しに見上げる立場にある。

太平製鉄社員として入社したのに、五年前、社内組織の合理化ということで、太平製鉄の所有不動産を管理する部門が、子会社として分離され、津秋もその子会社、太平製鉄不動産に回されてしまったためである。

おもしろくなかった。（いっそ、やめようか）と、そ

のとき何度も思った。

やめなかったのは、これという転職のあてがなかったせいもあるが、直接の上司で、やはり子会社へ移る松村に、情をこめて、説得されたからである。

「きみ、サラリーマンというのは、だるまとおなじなのだ。手をもがれ、足をもがれて行くうちに、最後に円満になって落ち着く。辛抱して、だるまさんになるんだ」頭のすっかりはげ上がった松村が、その頭の汗をふきながら、親身になって言った。少し見当ちがいの忠告のような気もしたのだが、松村は、全人生の知恵と経験をしぼり出すような口調であった。

松村自身は、定年近いのに係長。子会社へ出て、ようやく課長という身の上であった。

ひとがいい。上の命令を命令として伝え、部下の言い分を部下の言い分として、そっくり上申する。「伝声管」と言われ、つまり、無能といわれるのだが、そのひとのよさは抜群であった。

佐代子が最初、流産したときには、夫婦できて、入院の世話をし、洗濯までしてくれた。

その松村に、心をこめて説得されて、しばらく身をあずけてみようという気になった。

サラリーマン社会で、人の心をつなぎとめるものは、やはり、人の心である。（この人が、これまでに言ってくれるものなら）と、思った。

松村は、自分が課長をする管理課に、津秋をひきいれた。

本社ビルと同じ敷地にある子会社は、エレベーターもない四階建の古びたビルであった。空に向かってそそり立つ高層ビルの足もとに、くたびれた乞食がひれ伏してでもいるような形である。それは、子会社の社員の将来性を示す姿でもあった。ただでさえ、うだつの上がらぬ男が、いよいよ、うだつが上がらなくなる。

管理課の平社員である津秋の仕事は、親会社が払いこんでくるビルの家賃をたしかめ、親会社の要求する補修営繕関係の伝票をきることである。

払いこみは、すべて銀行振込で行なわれるので、ただ形式的に帳面をたしかめればすむし、補修営繕は下請会社がきまっているので、機械的に伝票をきって、そちらへとりつげばよい。

伝票をきり、複写で控えをとり、形式的に印をおし、また伝票をきり、複写で控えをとり……。

くる日も、くる日も、その同じ仕事の連続であった。

津秋は、その日も伝票をきり、複写をつくるという作業をくりかえしていた。

（うまい話があるが、どうだね）という小野田のささやきが、ときどき、耳によみがえってくる。水銀灯に浮かび上がったガソリン・スタンドの風景が目先の先にちらつく。

津秋は下唇をかみ、黙々と伝票をきり、印をおしていた。（五百万で、すてきよ）という佐代子の声も、きこえてくる。

「津秋くん、今日はきみの人事相談日だ。本社へ行ってきたまえ」

課長の松村が、ふいに声をかけてきた。時計を見ると、十一時であった。

「……わたしは、別に相談することはありません」

本社の人事課には、津秋のかつての同僚の赤坂が係長をしている。要領のよい、いやみな男であった。その顔を見たくもない。どうすればいやなやつに会わずにすむか、相談したいくらいであった。

松村は、はげ頭をなでながら、眉を寄せた。

「きみ、これも、仕事のうちだ。月給の中にふくまれていることなのだ。精神修養だと思って、行ってきたまえ」

津秋は、行きたくなかった。親切めかした人事相談員の顔と向かい合っているうち、前日のうまい話のことを、口走ってしまいそうに不安がした。

津秋を立たせたのは、机を並べている南ナオミであった。

「津秋さん、いっしょに行きましょ。わたしも、本社の人事部に用があるの」ひとつのはずみであった。

サラリーマン津秋は、はずみに弱い。はずみからはずみで、生きているようなところがあった。

津秋は、つられて腰を浮かせた。（なんでもないことだ。ひまつぶしに行つてこよう）

黒大理石をふんだんにつかった本社ビルの一階エレベーター・ホールは、ハリウッド映画の舞台を見るようであった。

高速のエレベーターは、津秋とナオミを一挙に十階へひき上げ、その廊下へ放り出した。

ナオミは人事部関連会社課へ、津秋はその隣の人事相談室へはいった。

相談室には、ゆったりした応接セットが置かれ、大学の心理学の講師というカウンセラーが、つくり笑いを浮かべて、津秋を迎えた。

津秋の部署と氏名をきいて、助手の女の子が隣室へ立って行き、一冊のファイルをもってきた。津秋の生い立ちからはじまって最近の勤務評定、家族の動静、健康状態にいたるまで、すべてがとじこんである。

カウンセラーは、上目づかいに津秋を見ながら、その綴りをめくった。津秋の人生そのものを評定しながら、舌なめずりしているかっこうである。

（おれの人生が、伝票と同じにとじこめられてたまるか。おれには、そうした中にとじこめられない何かがあるんだ）

津秋は、そんなふうに、声を上げて叫んでみたい気がした。水銀灯に浮かび上がったガソリン・スタンドのさわやかな風景が、また目の前にちらついた。

そのとき、ドアが開いて、眼鏡をかけたやせた小男がはいってきた。

「やあ、きみか」

小男は、津秋に横柄おうべいな声をかけた。津秋が会うのを恐れていたかつての同僚で同期入社社の赤坂であった。津秋がきたら知らせるようにと、助手の女の子に言いつけておいたのであろう。

津秋はむっとした。

「どうだね。元気でやっとなるかね」

赤坂は、津秋の気持ちを逆なでするような口調で言った。

津秋は「うん」とだけ言い、目に強い光をこめて、赤坂を見返した。

カウンセリングは、社員の不平不満をカウンセラーがきいて、いっしょになって考えてやるという制度で、そうすることで、社員のもやもやしたものを発散させ、士気キラル・アップ昂揚をはかろうという会社のねらいである。

建前としては、カウンセラーと社員が一对一でやるべきであって、第三者なり会社側の人間がいてはおかしい。（なぜ、おまえがきたのか）と、にらみつける気持ちであった。

赤坂には、「電気ねずみ」というあだ名があった。うわさや情報に敏感で、いつも上役にくっついて、うろちよろし、まわりの者をかじって出世するというタイプだったからである。津秋も、その被害者であった。

入社早々、津秋と赤坂は机を並べたが、津秋が席を立てている間にかかってきた重要な電話のことづけを、赤坂は忘れたふりをして伝えてくれない。あるいは、自分に都合のよい用件だと、そのまま知らぬ顔をして、横ど